

2018 年 6 月 24 日（日）「迷える羊への思い」

マタイ 18:12-14

12 あなたがたはどう思いますか。もし、だれかが百匹の羊を持っていて、そのうちの一匹が迷い出たとしたら、その人は九十九匹を山に残して、迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか。13 そして、もし、いたとなれば、まことに、あなたがたに告げます。その人は迷わなかった九十九匹の羊以上にこの一匹を喜ぶのです。14 このように、この小さい者たちのひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではありません。

【序論】

「迷える羊」についての主イエスの譬話はキリスト教のシンボルとも言えましょう。私がキリスト教大学に進学が決まった時に、高校の卓球部の顧問の先生がやって来て、「この迷える羊を救っておくれ」と（冗談で）懇願されたのを覚えています。キリスト教が「迷える羊」に救いの手を差し伸べる宗教だというイメージは一般的なのでしょう。東京衛生病院の壁にも、イエス様が小羊を抱いている絵が飾ってあります。

さて、「迷える羊」とはどういう存在であるか。実は、この言葉の捉え方は、置かれる文脈によって変わってくるのです。主イエスのこの譬話は、マタイだけでなくルカ（15:4-7）も記録しています。ただ、両者は扱っている文脈に違いがある。

マタイ：罪を犯した信徒の回復（救われた信徒が何らかの罪を犯し、ひとたび神の許を離れてしまうが、主がその信徒を血眼になって探し求めること）

→罪を犯した信徒を諭す契機に続く（18:15-17）

ルカ：罪人の回心（遊女・取税人・罪人といった社会的に失格者のように見える人々と交わる主イエスを咎めた宗教指導者に対し、彼らに注がれる神の恵みが語られている）

→なくした銀貨の譬（ルカ 15:8-10）、放蕩息子^{放蕩息子}の譬（ルカ 15:11-32）に続く

このように比較してみますと、マタイは教会内における「小さい者」のつまずきの問題を扱っていることが分かるでしょう。18 章に入ってからの流れで見ても、子どもに代表される「小さい者」をつまずかせてはならないということが教えられてきました。

「小さい者」は主イエスと同一視されるほどに主と近い関係にある。そして、今日の箇所からも、信仰が弱く、つまずきやすい人がそのような存在として愛されていることが分かります。教会が弱い人々、とりわけ罪を犯しやすい人をどう扱っているかが問われる箇所であります。

【本論】

本論 1. つまずきとは

あなたがたはどう思いますか。もし、だれかが百匹の羊を持っていて、そのうちの一匹が迷い出たとしたら、その人は九十九匹を山に残して、迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか。(18:12)

羊飼いに關するテーマは旧約聖書によく見られるため(詩篇 23 篇、イザヤ 40:11、エゼキエル 34:11-16 など)、ユダヤ人には馴染み深いものでした。彼らは「羊飼ひ」と聞くと、イスラエルを養ひ給う神をイメージすることができたのです。主イエスが「**だれかが**」と言っておられるところには、明らかにご自分と置き換えようとする含みがあります。「**百匹の羊**」とは、一人の羊飼ひが養うことのできた羊の一般的な数です。多い人は 300 匹の面倒を看たとも言われます。

さて、主イエスはここで、100 匹のうちの 1 匹が迷い出る状況を想定しておられます。「迷い出る」(πλανάω)とは「横道へ逸れる」「道に迷う」などというニュアンスですが、イメージされる状況は、群を集めてみたら 1 匹見当たらないということでしょう。羊飼ひはそっくりな羊の微妙な違いを見分けることができ、それぞれに名前を付けていると言います。これは比喩的に、神(主イエス)が一人一人の信徒を知り、見分け、その体調(靈的狀態)をよくご存知であることを表しているでしょう。そして、このストーリーでは、一人の信徒が誘惑に遭い、罪を犯し、神の許から離れてしまったことが想定されています。

私たちが「つまずく」という表現を使うことがあります、人はどのような時に信仰につまずくのでしょうか。私は四つの可能性を考えてみました。第一に、自分の問題によるつまずきです。自分の中に弱い部分があつて、そこを悪魔に狙われる。金銭、名譽、異性といった問題に捕えられ、信仰者としてあるまじき行為に及んでしまう。周囲からの信賴を失い、教会にいられなくなってしまう。残念ですが、こういうことは少なからず起きてきます。第二に、他人の問題によるつまずきです。誰かの罪、とりわけ教職者の罪を見て、キリスト教に幻滅してしまう。こんな牧師には着いていけないと感じてしまう。これもまた残念ながら、よくある話です。第三に、誰かから言われた言葉によるつまずきです。牧師と信徒、あるいは信徒同士の關係において傷つく経験をする。第四に、神に対するつまずきです。なぜ自分の祈りは聞かれないのか。なぜこんなひどいことが世界で起きているのに、神は黙っておられるのか。そういった神への不信によるつまずきということも考えられます。

つまずきは教会生活の中で起こり得ることであって、被害者にも、加害者にもなり得ます。自滅する場合もある。しかし、今日の箇所のポイントは「つまずき」自体にはありません。むしろ、つまずいた信徒をどうするかが問題となっているのです。

本論 2. 迷った者を探し求める主イエス

12 節後半で、「その人は九十九匹を山に残して、迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか」と言われます。これは普通に考えまして、あり得ない話なのです。経済的打算に基づいて考えるならば、迷い出た一匹は放っておいて、残りの 99 匹を守る方がはるかに賢いでしょう。99 匹が野原に残されたら、ことごとく野獣に襲われてしまうかも知れません。ですから、これは一種の誇張であると思われます。主イエスが言わんとしていることは、これを文字通りに取るということではなく、その羊飼いが一匹に対して抱いている執着心の強さです。その一匹は、世の誘惑に捕われやすく、罪に陥りやすく、他の信徒から見ればちょっと「困った人」かも知れません。人を傷つける発言をしたり、誰かとよくトラブルになったり…。あるいは、何らかの罪を犯し、教会に来られなくなってしまいう人もかも知れません。様々なケースが考えられます。

いずれにしても、主イエスはご自分に見立てた羊飼いが、その一匹のために出て行って、探し回ると言われるのです。これは普通の人にはできないことではないか。「自業自得だ」「いなくなってくれて助かった」という冷たい言葉が陰で囁かれるかも知れません。しかし、主イエスはそうではない。なぜか。それは、その信徒がご自分のからだの一部だからです。誰一人として、罪がなくなったからキリストのからだの一部とされたわけではありません。赦された罪人として、キリストのからだの構成員となったのです。ですから、主イエスがつまずいた一人の信徒を探し求めるとは、ご自分のからだの一部がなくなり、痛み、どうしても取り戻したくて歩き回るといことなのです。

私たちは、靴に小石が入るだけで歩きにくく感じるのではないのでしょうか。指の一本でも怪我をすれば、生活が困難になるのではありませんか。主イエスにとって、一人の信徒のつまずきというのは、まさしくそういうことなのです。

- ・ ですから、ちょうど、からだの一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。

(I コリント 12:12)

- ・ それどころか、からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。また、私たちは、からだの中で比較的尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。(I コリント 12:22-23a)

このパウロの思想は、まさしく羊飼いとしての主イエスの心を反映しています。

新約聖書外典の一つとされている『トマス福音書』には、失われた一匹の羊が一番大きな羊であったという話が載せられているようです。これが主イエスの福音の本質から大きく逸脱した話であることは言うまでもありません。主イエスは「最も小さい者」を探しに行かれる。何の値打ちもないように思われる羊であっても、主の視点では違う。その存在を慈しんでおられる主イエスの心を私たちは知るのです。

本論 3. 立ち返った者への喜び

そして、もし、いたとなれば、まことに、あなたがたに告げます。その人は迷わなかった九十九匹の羊以上にこの一匹を喜ぶのです。(18:13)

ここでの言葉は、やや誤解を与えやすいかも知れません。失われた一匹の羊を、他の99匹以上に主は喜ばれると…。これは、迷うことなく歩んできた信徒にとっては、少々妬みを引き起こす言われ方ではないでしょうか。但し、ここでは決して99匹について羊飼いが喜ばないとは言われていません。また、父なる神様がご自分の許で安らかに過ごしている信徒のことを心に留めておられないということでもない。そのような人は、もう既に神の許で良いものをたくさん受けているのです。しかし、迷い出た羊は危うく滅びの沼に沈んでいくところを見つけ出された。つまり、ここでは失った宝を見つけた特有の喜びが語られているのです。

私たちも大切なものをなくし、懸命に探してついに見つかったという経験があるでしょう。私自身の経験としては、息子が幼稚園の頃、知り合いと一緒にファミレスに行ったとき、会計を済ませた後、私と息子二人でトイレに行ったのですが、先に飛び出して行ってしまい、どこを探しても見つからないということがありました。幸い、一人で元のテーブルに座っていたのを見つけたのですが、親としてはかなり焦った経験でした。

もっと大きな事件として、N先生からお聞きした話があります。先生の娘さんが3歳くらいの頃、教会で集会が行なわれていたとき、2歳年上の女の子と二人で遊んでいたのですが、そのまま二人でイトーヨーカ堂に行ってしまったようなのです。年上のお姉ちゃんは道をよく知っているの教会に戻れたのですが、先生の娘さんは途中ではぐれてしまい、迷子になってしまいました。集会が終わって娘さんがいないことに気づいた先生は、(半狂乱で) あちこち探し回りました。2～3時間は探したでしょうか、どこからか「お父さん、お父さん」と呼ぶ子どもの声が聞こえたそうです。そして、ついに歩道にへたり込んでいる娘さんを見つけたということでした。もちろん、その時は「どうして勝手に出て行ったんだ！」などという叱る言葉は出てくるはずもなく、ただ抱き

しめて泣く以外にはできなかったそうです。つまりいていなくなった信徒（ご自分の子ども）を見失った神様の思いというもの、そういうものではないでしょうか。

この教会でも、私につまずかれる方がいらっしゃるでしょう。私の顔も見たくない、声も聞きたくない、そう感じられている時に、他の信徒さんからのフォローがあることは、本当にありがたいことなのです。また、牧師である私が、信徒の方の配慮ある言葉によって支えられることもあります。

**このように、この小さい者たちのひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみ
ところではありません。（18:14）**

18 章に入ってからずっと続いてきた「小さい者」に関する教えの一つの結論があります。つまずきやすい「小さい者」がいる。見栄えのしない器官だとして重んじられない部分がある。罪を犯し、教会全体に痛みをもたらす人もいるかも知れません。そういう信徒を私たちはどのように見ているか。もし彼（彼女）が滅びることを願ったとしたら、それは主イエスにある共同体の姿ではないでしょう。父なる神様の心を知り、主イエスの思いを知り、信徒同士でも同じように思いやることが求められているのです。次回、15 節以下では、罪を犯した信徒にどのように声をかけ、立ち返るよう働きかけるかについて学びます。主イエスはそこまでの配慮をもって弟子たちに教えられた。十二弟子の中にもつまずきやすい人がいたのでしょう。主は確かにつまずいたペテロをも立ち直らせてくださいました（ヨハネ 21 章）。役に立たなくなったら捨てられるような世の中であって、キリストの教会はそういう場所ではないということが証しされています。

【結論】

私たちの信仰生活は「つまずき」を避けて通ることはできません。自分が被害者にも加害者にもなり得る存在であることを明記したいと思います。それゆえに、人を裁くことには気をつけたいのです。同時に、罪に迷う人を探し求める主の心を忘れないようにしましょう。一人の人がつまずくならば、それは教会全体の痛みとなります。そして、主イエスご自身もその人のために苦しんでおられることを心に留めたいのです。

【祈り】

「小さき者」を憐れみ給う、天の父なる神様。私たち一人一人が弱い羊であり、罪に沈みやすい存在です。「迷える羊」とは、人事ではなく、私自身のことです。どうぞ、このような者をも見捨てないでください。そして、主イエスと同じ心をもって隣人に接することができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

一匹一匹の羊を知り、その名を呼び給う、父なる神の愛。

迷い出た羊を探し求め、立ち返ることを求め給う、主イエス・キリストの恵み。

主イエスと同じ心をもって、隣人の救いを願わせ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。